

ラオス中等教育学校における 日本語学習者の言語学習ビリーフ

——教科書開発と教師研修の改善に向けて——

吉川 景子

1. はじめに

国際交流基金（以下、JF）が行った日本語教育機関調査によると、ラオスの日本語学習者数は、2009年度は540名、うち中等教育段階の学習者は0名であったが、2018年度は1,955名、うち中等教育段階の学習者数は785名（40.2%）となり、近年、ラオスの日本語学習者数全体が増えつつあると同時に中等教育段階の学習者が増えていることがわかる（国際交流基金 2018）（表1）。

表1 ラオスの日本語学習者数

調査年度	日本語学習者数	中等教育段階の学習者数 (全体の学習者数に占める割合)
2009年	540名	0名（0%）
2012年	464名	69名（14.9%）
2015年	1,046名	202名（19.3%）
2018年	1,955名	785名（40.2%）

ラオスではカリキュラム改革により、2010年に前期中等教育カリキュラム、2011年に後期中等教育カリキュラムが施行され、日本語が第二外国語¹⁾の一つとして位置づけられた。それにより、2015年9月よりビエンチャン特別市にある公立中等教育学校1校において、正式に日本語科目が開講され、2016年9月に新たにパイロット校に指定されたビエンチャン特別市の公立中等教育学校2校を加えた3校において、中学1年生の日本語授業が開始された²⁾。現在、ラオス教育スポーツ省教育科学研究所がJFと連携し、前期中等教育4年、後期中等教育3年、合計7年間続く日本語科目のカリキュラムと教科書の開発、教師養成を行っている。

前期中等教育のための日本語カリキュラムは、2017年12月と2018年6月に検

討会議が開かれ、教育スポーツ省に承認された。カリキュラムには21世紀型スキルを踏まえ、学習者中心の授業を通して、問題解決能力、協働する力、異文化理解の態度などを養うことが目標として掲げられている。教科書は毎年1学年1冊分の試行版作成と前年度の試行版の改訂が行われており、2019年9月から始まる年度には中学4年生は試行版を、中学1～3年生は正規版を使って学習する。教師養成については、公立中等教育学校において日本語が教えられる公務員の教員がいないため、各学校において他教科の現職教員を選出し、ラオス国立大学文学部日本語学科の協力を得ながら、長期休暇中に日本語と教授法の集中研修、学期中に週1回の研修を行って対応している。

パイロット校において日本語科目が導入されていく中、カリキュラム検討会議では、教師が新しい概念を取り入れた教材に対応して教えられるようになるのか、また生徒はそのような授業になじむのかなど、新しい変化への懸念の声も聞かれた。そこで、日本語を学習している生徒たちが言語学習についてどのようなビリーフを持っているのかを調査し、教科書開発や教師研修で考慮すべき点を検討する材料とすることにした。本稿では生徒たちの言語学習ビリーフと教科書のコンセプトや教室活動内容との間にギャップがないかを考察する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

ビリーフとは学習における信念、確信などと訳されている。言語学習ビリーフは、言語（外国語）学習とは何か、どうあるべきか、学習者が言語学習に対して持っている考え方を表したものである。Horwitz（1987）は授業や教室活動が、学習者のビリーフと異なる場合、習得が制限されたり、ビリーフが学習ストラテジーに影響したりすることを指摘し、教師が学習者のビリーフを把握する重要性について述べている。そして、学習者のビリーフを把握するために、「外国語学習の適性（Foreign Language Aptitude）」、「言語学習の難易度（The Difficulty of Language Learning）」、「言語学習の本質（The Nature of Language Learning）」、「学習とコミュニケーションストラテジー（Learning and Communication Strategies）」、「動機（Motivations）」の5領域34項目から成る Beliefs About Language Learning Inventory (BALLI) を開発した。その後、多くのビリーフ調査が BALLI をもとに行われている。

海外で学ぶ日本語学習者のビリーフ調査は大学生を対象としているものが多い（片桐 2005、和田 2007、阿部 2009、高崎 2014など）。片桐（2005）は、フィリピン人に対する日本語教育のための資料を提供することを目的に、フィリピ

ンで日本語を学ぶ大学生の言語学習ビリーフ調査を行った。和田 (2007) は、スリランカ人大学生の言語学習ビリーフを調査し、スリランカの日本語教育の問題点と照らしあわせることによって、どのような改善が必要であるかを考察した。その結果、学習者のビリーフと現状のギャップを指摘し、それを埋める必要があると述べている。阿部 (2009) は、学習者が会話能力上達のニーズを持ち続けることにビリーフが関連しているのではと考え、会話授業の改善につながるためにビリーフ調査を行った。高崎 (2014) は、コース編成やカリキュラム改定のための資料とするため、メキシコにおける日本語学習者の日本語・日本語学習についての考えを調査し、明らかにした。これらのビリーフ調査はカリキュラムや授業内容の検討、改善のための資料やデータとするために行われている。

中等教育段階の日本語学習者を対象としたビリーフ調査には、横林・ウールブライト (2006)、Jitbantao (2010) などがある。横林・ウールブライト (2006) はオーストラリアの私立校4校の7年生から12年生の日本語学習者に調査を行い、4校を例に教育の実態を紹介し、それが学習者のビリーフにどのような影響を与えているかについて検討した。その結果、日本語学習の動機づけと期待について肯定的で、国際・異文化理解、日本との交流促進を目標とする授業を支持するビリーフであることを示した。Jitbantao (2010) はタイのバンコクにある国立高校16校の日本語専攻の高校3年生および日本語教師を対象にBALLIをもとにした調査を行った。その結果、日本語授業において動機付けを高く維持することが重要であること、高校生は大学入試に必要な単語、漢字、文法を重視していることを明らかにした。これらのビリーフ調査は実際に行われている授業や授業の位置づけにおいて、学習者がどのようなビリーフを持っているかを明らかにするために行われている。

本稿では、新たに始まったラオスの中等教育学校の日本語学習者を対象に言語学習ビリーフ調査を行う。その結果から、現在開発されている教科書のコンセプトと生徒たちの言語学習ビリーフにギャップがないかを考察し、今後の教科書開発、教師研修に生かすことを目的とする。また、ラオスの中等教育学校で日本語を教えるラオス人日本語教師のビリーフ調査の結果 (吉川 2018) と比較し、教師と生徒の言語学習ビリーフに異なる傾向が見られるかどうかについても考察する。

3. 調査の方法

3. 1 質問紙

本調査では、Horwitz (1987) のBALLIの質問紙をもとに27項目を採用し、片桐 (2005)、阿部 (2009)、高崎 (2014) の質問項目を加え、合計40項目からなる質問紙を作成し、以下の5領域を日本語学習へのピリーフとした。その領域は、「外国語学習の適性 (6項目)」、「言語学習の本質 (10項目)」、「学習とコミュニケーションストラテジー (11項目)」、「動機 (7項目)」、「教師の役割と学習者の自律性 (6項目)」の5つである。

現在開発されている教科書のコンセプトと学習者のピリーフにギャップがないか、学習者にとって教科書の活動内容がなじみやすいかどうかを検討するため、新たに加えた質問項目は、文字学習について (質問項目36)、異文化理解について (質問項目9、21)、教室活動について (質問項目11、16、27)、動機について (質問項目38)、教師の役割と学習者の自律性について (質問項目5、10、18、32、37、40) である。各質問には「(1) 強く賛成」、「(2) 賛成」、「(3) 賛成でも反対でもない」、「(4) 反対」、「(5) 強く反対」の5件法で回答してもらった。質問紙はラオス人の翻訳協力者に中学1、2年生でも理解できるようなラオス語に翻訳してもらった。また、質問紙に研究の趣旨と研究以外の目的には使用しない旨を記載した。

BALLIとは別に、日本語の勉強が好きかどうかについての質問を設け、「(1) とても好き」、「(2) 好き」、「(3) どちらでもない」、「(4) あまり好きではない」、「(5) 全然好きではない」の5段階で評定してもらい、回答してもらった。パイロット校では、日本語を勉強したい生徒が自分で選んで学習しているのではなく、学年ごとに日本語を学習するクラスが指定されている。そのため、生徒が日本語科目についてどう思って学習しているのかを尋ねた。

3. 2 調査時期

ラオスの中等教育学校では9月から新学期が始まるため、授業が始まってクラスの状態が落ち着いたと考えられる2017年10月から11月にかけて質問紙調査を実施した。

3. 3 調査協力者

協力者はビエンチャン特別市にある公立中等教育学校のパイロット校3校における中学1、2年生の日本語学習者258名である。調査当時、中学1年生は

2017年9月から日本語学習を始め、『にほんご1』正規版を使って学んでいた。中学2年生は2016年9月から日本語学習を始め、『にほんご1』試行版を使って学んだあと、『にほんご2』試行版を使って学んでいた。クラス替え、他校からの転入などの影響で、3校とも中学2年生から初めて日本語を学習する生徒が数名おり、授業時間外に教師が授業についていけるようサポートしていた。

3. 4 調査手続き

調査にあたって、3校の校長に書面で許可を得た。授業見学時に筆者が立ち会い、その場で回答、回収したクラスと、ラオス人日本語教師と日本語パートナーズ³⁾に協力してもらい、筆者が立ち会わずに実施したクラスがあった。生徒に対しては、「このテストは皆さんの成績とは全く関係ありません。皆さんの外国語（日本語）学習に対する考えを知るための調査です。気楽にお答えください」と教示した。中学1、2年生の生徒にとって、理解しにくい質問項目があった場合は、ラオス人日本語教師から簡単な言葉で説明してもらった。

4. 結果と考察

質問紙調査に協力してくれた3校の生徒258名（中学1年生4クラス152名、中学2年生3クラス106名）のうち、BALLIのすべての項目に回答し、不備がなかった179名（中学1年生101名、中学2年生78名）を分析の対象とした。

4. 1 日本語学習への態度

日本語科目が好きかどうかについての回答は、「(1) とても好き」(85名)、「(2) 好き」(81名)、「(3) どちらでもない」(3名)、「(4) あまり好きではない」(5名)、「(5) 全然好きではない」(1名)、無回答(4名)であった。ラオスの生徒は自分で日本語を選択したわけではないが、約93%の学習者が「とても好き」、「好き」と回答しており、日本語学習を好意的に捉えていることが明らかになった。

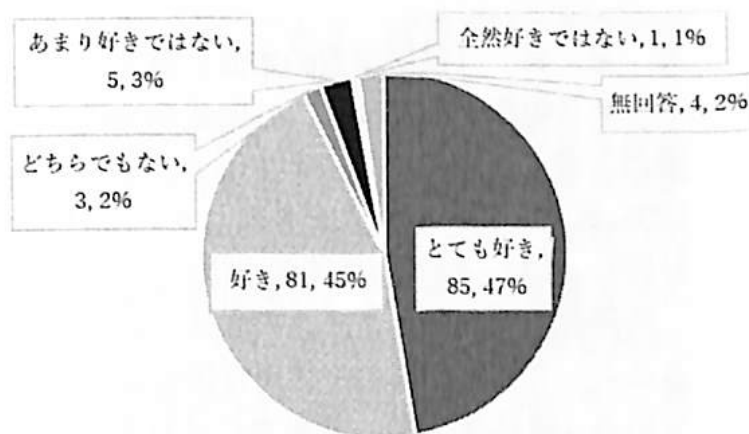


図1 日本語科目が好きかどうか

4. 2 BALLIの結果

5領域の調査結果を各表に示す。各回答の平均値と標準偏差 (SD)、強く賛成、賛成の2つを合わせて賛成派とし、その割合を%で示した。平均値の小さい項目から大きい項目の順に上から下へ並べており、平均値が小さいほど、賛成寄りのピリーフになる。

4. 2. 1 「外国語学習の適性」領域

表2 外国語学習の適性についてのピリーフ

	質問項目	平均	SD	賛成派
20	すべての人が外国語を習得できる。	1.40	0.99	96%
13	私は日本語が習得できていると思っている。	2.01	0.80	79%
1	大人より子供の方が外国語を学びやすい。	2.17	0.99	74%
6	ラオス人は外国語学習が得意だ。	2.37	0.97	57%
25	ある言語はほかの言語に比べてやさしい。	2.62	1.04	50%
26	日本語は (1) とても難しい言語 (2) 難しい言語 (3) 難しきは普通の言語 (4) 簡単な言語 (5) とても簡単な言語	2.80	0.88	28%

ラオスの生徒の96%はだれでも外国語を習得できると考えており、79%が自分自身も日本語が習得できると自信を持っている(項目20、13)。また、日本語は難しさが普通だと感じている人が多い(項目26)。本調査は中学1、2年生が対象であり、進度はそれほど進んでおらず、学習内容が簡単なため、今後、後期中等教育段階に進んだ時点でも日本語の難易度に関して、考えが変わらないかどうか、再度調査する必要がある。

4. 2. 2 「言語学習の本質」領域

ラオスの生徒の95%は、外国語を学習する上で、語彙を覚えることが一番重要だと考えていることがわかった(項目30)。文字学習についても、賛成派が82%、反対と回答した人が8名しかいないことから重視していると言える(項目36)。また、83%の生徒が文法について重要だと考えている(項目14)。

外国語学習の際、ラオスの生徒の80%が言葉だけでなく、その国の文化を知ること、そして91%の生徒が自国の文化についても見直すことが大切だと考えている(項目21、28)。教科書には日本、アセアンを中心としたほかの国の情報について、ラオスと比較しながら考える機会を設け、異文化理解の態度育成に

表3 言語学習の本質についてのビリーフ

	質問項目	平均	SD	賛成派
30	外国語学習の中で一番重要なのは単語を覚えることだ。	1.44	0.61	95%
21	外国語を学習するとき、その国の文化だけではなく、ラオスの文化についてももっと理解できるようになる。	1.65	0.75	91%
36	日本語の文字学習は、話すことを学習するのと同じくらい重要だ。	1.84	0.82	82%
28	外国語を習得するためには、その国の文化を知ることが必要だ。	1.94	0.90	80%
14	外国語学習の中で一番重要なのは、文法の学習だ。	1.95	0.81	83%
15	外国語学習の方法はほかの科目を学習するのとは違う。	1.97	0.84	80%
33	外国語学習の中で一番重要なのは、ラオス語からどうやって翻訳するかだ。	2.10	0.87	74%
8	外国語学習はその外国語が話されている国で学習するのが一番いい。	2.14	1.16	67%
34	外国語を聞いて理解するよりも、話すほうがやさしい。	2.39	1.04	60%
7	外国語を話す・聞くより、読む・書くほうがやさしい。	2.79	1.10	46%

つながるようにしているが、そのような活動はラオス人の生徒に受け入れられやすいと考えられる。

4. 2. 3 「学習とコミュニケーションストラテジー」領域

ラオスの生徒の94%は発音を重視し(項目2)、50%の生徒が間違えてはいけない、正しい発話をしなければならないと考えている(項目19)。このことから、ラオスの生徒はきれいな発音、正しい発話が大切であり、授業では正確さが求められると感じていると言える。

ラオスの生徒の93%が日本人と日本語を練習するのは楽しいと感じている(項目39)。2016年度に1校、2017年度からは3校ともに日本語パートナーズが派遣されており、ラオス人教師とチームティーチングを行っている。生徒たちは日本人に接する機会が多く、日本人にある程度慣れ、それがいい影響を与えていると考えられる。ペアーワークやグループワークなどの教室活動も好み、日本語で話すことに恥ずかしさを感じる人も少ない(項目11、16、27、3)。教科書には学習者中心の授業になるよう、協働作業を取り入れた活動が多く取り入れられているが、そのような活動を通して学習することはラオスの生徒に受

表4 学習とコミュニケーションストラテジーについてのピリーフ

	質問項目	平均	SD	賛成派
2	きれいな発音で話すことが大切だ。	1.5	0.72	94%
39	日本人と日本語を練習するのは楽しい。	1.54	0.74	93%
11	私はペアワークやグループワークの活動が好きだ。	1.59	0.75	92%
16	学習者が積極的に教室活動に参加するような授業は良い授業だ。	1.70	0.81	88%
12	繰り返し練習することが重要だ。	1.85	0.96	80%
29	外国語学習の誤りは初期の段階で訂正しなければ、後で訂正するのは難しい。	2.22	1.02	67%
22	CDで練習することは重要だ。	2.37	0.94	59%
19	正しく言えるようになるまでは日本語を話すべきではない。	2.74	1.30	50%
24	日本語の単語がわからない時は意味を推測すればいい。	3.22	1.06	26%
27	教室で、ラオス人同士で日本語を話しても、学習の役に立たない。	3.58	1.31	19%
3	他の人と日本語で話すのは、はずかしい。	4.16	1.01	9%

け入れられやすいと言える。

単語の意味の推測については、ラオスの生徒の26%しか賛成していない（項目24）。4. 2. 2の項目30で見た通り、語彙を覚えることが重要だと考えている。中学1、2年生の学習段階では、単語を推測するというストラテジーに触れる機会が少ないことも考えられる。今後学年が上がるにつれて、すべての語彙がわからなくても、推測して取り組めるような機会を増やしていくとよい。

4. 2. 4 「動機」領域

ラオスの生徒の92%が、外国語学習の目的はコミュニケーションがとれるようになること（項目38）だと考えており、日本語が話せるようになりたい、日本人や日本文化についても知りたいと考えている人が多い（項目17、4、9、31、35）。まだ中学1、2年生であるが、日本語が将来の就職に結びつくかもしれないというイメージをもっていることもわかった（項目23）。学習動機は統合的、道具的の両方の傾向があると言える。

表5 動機についてのビリーフ

	質問項目	平均	SD	賛成派
17	私は日本語が上手に話せるようになりたい。	1.28	0.50	98%
4	私は日本人のことをもっと理解するために日本語を学習したい。	1.51	0.74	95%
38	一般的に外国語学習の目的はその言語でほかの人とコミュニケーションがとれるようになることだ。	1.68	0.71	92%
9	私は言語の背景にある文化も習いたい。	1.77	0.85	88%
31	私は日本人の友達がほしい。	1.88	0.90	77%
23	もし日本語ができれば、いい仕事を得られるだろう。	1.91	0.85	79%
35	ラオス人は日本語や日本文化を知ることは重要だと考えている。	1.93	0.78	79%

4. 2. 5 「教師の役割と学習者の自律性」領域

表6 教師の役割と学習者の自律性についてのビリーフ

	質問項目	平均	SD	賛成派
18	外国語学習に成功するにはいい教師が必要だ。	1.53	0.78	91%
10	教師は学習者を一生懸命学習させなければならない。	1.57	0.69	94%
5	教師の言う通り勉強すれば外国語の上達が早くなる。	1.87	0.82	86%
37	教師は宿題を出すべきだ。	2.12	1.15	73%
32	自分の間違いを自分でチェックするとき、一番学習できる。	2.30	0.90	60%
40	学習者の評価は教師からされるべきだ。	2.50	1.23	55%

ラオスの中学1、2年生の生徒にとって、学校の教室で行われる授業が学習の中心の場であるため、いい教師が必要であり、教師のもとで勉強していれば上手になると考えるのは自然なことである（項目18、10、5）。

4. 2. 6 生徒と教師の言語学習ビリーフの違い

本調査によるラオスの生徒の言語学習ビリーフの結果と、吉川（2018）の調査によるラオス人教師の言語学習ビリーフを比較し、違いがあるかを考察した。ラオス人教師への調査の方法は次の通りである（表7）。

表7 ラオス人教師への調査概要

調査時期	2017年10月
調査協力者	パイロット校3校で教える日本語教師12名 全員20～30代、パイロット校で日本語科目が導入されることになった際、他教科を教えていた教師が日本語学習を始め、日本語を教えることになった。日本語レベルは初級、日本語学習歴は3か月～2年数か月。
調査方法	生徒への調査と同じ質問紙を使用
調査手続き	教師研修時に直接配布し、その場で回答。 欠席者には質問紙を渡してもらい、後日教師研修または学校訪問時に回収。研究以外の目的には使用しない旨を伝え、回答してもらった（質問紙にも記載あり）。

調査協力者の教師12名のうち、すべての項目に回答した9名分を分析の対象とした。生徒と教師の5領域のピリーフについて、各回答の平均値と標準偏差(SD)、t検定の結果を示した(表8-12)。

表8 外国語学習の適性についてのピリーフ

	質問項目	生徒		教師		t 値
		平均	SD	平均	SD	
1	大人より子供の方が外国語を学びやすい。	2.17	0.99	1.78	1.09	1.146
6	ラオス人は外国語学習が得意だ。	2.37	0.97	2.56	0.88	-0.548
13	私は日本語が習得できていると思っている。	2.01	0.80	2.22	0.83	-0.788
20	すべての人が外国語を習得できる。	1.40	0.99	1.56	1.01	-0.715
25	ある言語はほかの言語に比べてやさしい。	2.62	1.04	2.33	0.87	0.813
26	日本語は (1) とても難しい言語 (2) 難しい言語 (3) 難しさは普通の言語 (4) 簡単な言語 (5) とても簡単な言語	2.80	0.88	1.67	0.71	3.810**

** : $p < .01$ * : $p < .05$

「外国語学習の適性」領域のピリーフにおける生徒と教師の評定平均値の差の検定(t検定)の結果、項目26に有意差が見られた。共通点は、生徒も教師もすべての人が外国語を習得できると考えており、自分自身も日本語が習得できている割合が多かったことである(項目20、13)。異なる点は、教師は生徒より、「日本語は難しい言語だ」と捉えていることである。4. 2. 1で述べた通り、生徒は中学1、2年生が対象であり、調査当時、進度はそれほど進んでおらず、学習内容が簡単だったことが要因の一つと言える。一方、教師

はもともとほかの科目を教えており、勤務校に日本語科目が導入されることになったため、急遽日本語を勉強し始めた学習者でもある。なんとか中学1、2年生の日本語クラスが教えられるように、短期間の教師研修で日本語を学習する必要があり、より難しさを感じる状況にあったことが要因にあげられる。

表9 言語学習の本質についてのピリーフ

	質問項目	生徒		教師		t 値
		平均	SD	平均	SD	
7	外国語を話す・聞くより、読む・書くほうがやさしい。	2.79	1.10	2.67	1.12	0.337
8	外国語学習はその外国語が話されている国で学習するのが一番いい。	2.14	1.16	1.56	1.33	1.464
14	外国語学習の中で一番重要なのは、文法の学習だ。	1.95	0.81	2.00	1.00	-0.180
15	外国語学習の方法はほかの科目を学習するのとは違う。	1.97	0.84	1.67	1.00	1.050
21	外国語を学習するとき、その国の文化だけではなく、ラオスの文化についてももっと理解できるようになる。	1.65	0.75	1.44	1.01	0.778
28	外国語を習得するためには、その国の文化を知ることが必要だ。	1.94	0.90	1.89	0.93	0.18
30	外国語学習の中で一番重要なのは単語を覚えることだ。	1.44	0.61	1.67	1.12	-1.057
33	外国語学習の中で一番重要なのは、ラオス語からどうやって翻訳するかだ。	2.10	0.87	2.33	0.87	-0.785
34	外国語を聞いて理解するよりも、話すほうがやさしい。	2.39	1.04	2.11	1.17	0.768
36	日本語の文字学習は、話すことを学習するのと同じぐらい重要だ。	1.84	0.82	1.67	1.00	0.604

** : p < .01 * : p < .05

「言語学習の本質」領域のピリーフにおける生徒と教師の評定平均値の差の検定（t 検定）の結果、有意差は見られなかった。生徒も教師も外国語学習には、その国の文化に触れ、自国の文化について見直すことが必要だと考えており（項目21、28）、カリキュラムや教科書に載っている異文化理解を促進するための活動は双方にとって受け入れやすいと考えられる。学習方法についても、

生徒も教師も語彙を覚えること、文字学習が重要だと考えており(項目30、36)、ギャップが見られないため、効果的に語彙や文字学習ができるよう、教師が教室活動を工夫し、進めていくとよい。

表10 学習とコミュニケーションストラテジーについてのピリーフ

	質問項目	生徒		教師		t 値
		平均	SD	平均	SD	
2	きれいな発音で話すことが大切だ。	1.5	0.72	1.89	1.27	-1.521
3	他の人と日本語で話すのは、はずかしい。	4.16	1.01	3.56	1.59	1.688
11	私はペアワークやグループワークの活動が好きだ。	1.59	0.75	1.67	1.00	-0.287
12	繰り返し練習することが重要だ。	1.85	0.96	2.00	1.12	-0.455
16	学習者が積極的に教室活動に参加するような授業は良い授業だ。	1.70	0.81	1.56	1.01	0.529
19	正しく言えるようになるまでは日本語を話すべきではない。	2.74	1.30	3.78	1.48	-2.336*
22	CDで練習することは重要だ。	2.37	0.94	2.00	0.87	1.151
24	日本語の単語がわからない時は意味を推測すればいい。	3.22	1.06	2.67	1.12	1.530
27	教室で、ラオス人同士で日本語を話しても、学習の役に立たない。	3.58	1.31	3.22	1.39	0.799
29	外国語学習の誤りは初期の段階で訂正しなければ、後で訂正するのは難しい。	2.22	1.02	1.78	0.97	1.282
39	日本人と日本語を練習するのは楽しい。	1.54	0.74	1.78	0.97	-0.923

** : $p < .01$ * : $p < .05$

「学習とコミュニケーションストラテジー」領域のピリーフにおける生徒と教師の評定平均値の差の検定(t検定)の結果、項目19に有意差が見られた。共通点は、生徒も教師もペアワークやグループワークなどの教室活動を好み(項目11、18)、日本人母語話者と日本語を練習するのが楽しいと感じていることである(項目39)。カリキュラムに沿って教科書には協働作業ができるような活動を多く取り入れているが、双方に受け入れられやすいと言える。異なる点は、生徒は正しく言えるようになるまでは話すべきではないという意見が強かったが、教師はそう感じていないことである(項目19)。授業の中で、生徒が間違いを気にして恥ずかしがったり、積極的に話さなかったりしていたら、教

師は間違いを気にせず、とにかく口に出して言うよう、促すことができるだろう。また、間違いがあっても恥ずかしくないクラスのコミュニティーづくりが大切である。

表11 動機についてのピリーフ

	質問項目	生徒		教師		t 値
		平均	SD	平均	SD	
4	私は日本人のことをもっと理解するために日本語を学習したい。	1.51	0.74	2.11	1.05	-2.319*
9	私は言語の背景にある文化も習いたい。	1.77	0.85	1.56	0.73	0.728
17	私は日本語が上手に話せるようになりたい。	1.28	0.50	1.33	1.00	-0.299
23	もし日本語ができれば、いい仕事を得られるだろう。	1.91	0.85	2.11	1.05	-0.705
31	私は日本人の友達がほしい。	1.88	0.90	1.44	1.01	1.394
35	ラオス人は日本語や日本文化を知ることは重要だと考えている。	1.93	0.78	2.00	0.87	-0.249
38	一般的に外国語学習の目的はその言語でほかの人とコミュニケーションがとれるようになることだ。	1.68	0.71	1.56	1.01	0.511

** : p < .01 * : p < .05

「動機」領域のピリーフにおける生徒と教師の評定平均値の差の検定（t 検定）の結果、項目 4 に有意差が見られた。共通点は、生徒も教師も外国語学習の目的はコミュニケーションであり、日本語が話せるようになりたい、日本人の友達がほしい、日本文化について知りたいと考えていることである（項目 9、17、31、38）。異なる点は、生徒も教師も日本人のことについてもっと理解するために日本語を勉強したいと考えているが、生徒の方が強く思っていることである（項目 4）。

表12 教師の役割と学習者の自律性についてのピリーフ

	質問項目	生徒		教師		t 値
		平均	SD	平均	SD	
5	教師の言う通り勉強すれば外国語の上達が早くなる。	1.87	0.82	2.67	1.12	-2.817**
10	教師は学習者を一生懸命学習させなければならない。	1.57	0.69	1.89	0.93	-1.337
18	外国語学習に成功するにはいい教師が必要だ。	1.53	0.78	1.67	1.12	-0.498
32	自分の間違いを自分でチェックするとき、一番学習できる。	2.30	0.90	2.33	0.87	-0.103
37	教師は宿題を出すべきだ。	2.12	1.15	1.78	1.09	0.868
40	学習者の評価は教師からされるべきだ。	2.50	1.23	1.89	1.05	1.458

** : $p < .01$ * : $p < .05$

「教師の役割と学習者の自律性」領域のピリーフにおける生徒と教師の評定平均値の差の検定（t 検定）の結果、項目 5 に有意差が見られた。生徒は教師の言う通り勉強すれば外国語の上達が早くなると考えている（項目 5）。生徒が教師を信頼し、教師の指示に従って学習を進めることを、教師は常に念頭におき、生徒の学習を促進させる授業、生徒の自律、成長に導く授業を考えていく必要があるだろう。

5. ピリーフ結果から考える教科書開発および教師研修

ラオスの生徒のピリーフと教科書のコンセプトとのギャップがないかを検証し、今後の教科書開発、教師研修で考慮すべき点をあげる。開発中の教科書には、生徒が自ら考え、発見し、学習を振り返る、他者と協働し、課題を解決する、積極的にコミュニケーションをとり、表現する、異文化を理解し、自国についても振り返る、などができるように練習や活動がデザインされている。これらの点について、ラオス中等教育学校の中学 1、2 年生の生徒が積極的に取り組めると考えられる言語学習ピリーフは(1)から(3)である。

- (1) ペアワークやグループワークなど協働作業に肯定的である。
- (2) 日本、日本語、日本人に興味を持っており、日本語が上手になりたいと考えている。
- (3) 外国語学習には、言葉だけでなく、その国の文化を知り、自国の文化に

についても比較しながら考えることが大切だと考えている。

教科書にはペアやグループで会話やインタビューなどを行う活動が多く含まれており、相手の話に関心を持って聞きながら、進めるようになっている。各課の最後にまとめの活動があり、習った表現を使って、グループで課題に取り組むことができる。また、各課のトピックに関連した日本やアセアンの国の情報を載せており、情報を読むだけでなく、考えたり、調べたり、自国と比べたりして、意見を述べる活動ができる。ラオスの生徒はこのような活動について肯定的に捉え、取り組めるピリーフを持っていることがわかった。

一方、ラオスの生徒がもつ言語学習ピリーフで、留意すべき点は(4)から(7)である。

- (4) 語彙学習、文字学習、文法を重視している。
- (5) 50%の生徒が正しい発話をしなければならぬと間違いを恐れている。
- (6) 単語の意味を推測することについて賛成ではない人が多い。
- (7) いい教師といっしょに勉強すれば上達すると考えている。

文字学習については、ラオス語もアルファベット表記ではなく、ラオス文字があるため、日本語学習においても文字学習が大切だと感じているようである。開発中の教科書にはローマ字が併記されている。しかし、筆者が授業見学をした際、生徒たちは教師の発音を聞いて、ラオス文字で読み方を書いており、ほとんどの生徒はローマ字が読めないことがわかった。そのため、日本語の文字が読めるようにならないと、教科書が読めず、学習が難しくなると感じている可能性もある。7年間続けて学習する場合、文字学習をどのように扱うのか、今後、教科書を改訂する際に、ローマ字併記にするかしないか、別の方法にするのか検討する必要がある。

ラオスの生徒は、コミュニケーション志向はあるものの、文法も大切だと考えている。教科書には各課の最後に表現、文型をまとめて載せているが、文法説明は書かれていない。生徒に自分で表現、文型を発見し、分析してもらうためである。教師らにも一方的な文法説明はせず、まず生徒が自分で考えるように習慣づけてもらいたい。しかし、今後、文型練習や文法説明に対するニーズが高い場合は、学習進度も考慮し、文法を整理する項目や練習問題を設けるなど、検討する必要があるだろう。

ラオスの生徒の50%が、間違えてはいけない、正しい発話をしなければならぬと考えているため、教師は授業中、間違いを恐れず、積極的に発言できる雰囲気を作っていく必要がある。

単語の意味の推測については、学習の初期段階であり、一字一句聞きとれな

くても推測できるということが、まだ認識されていないようである。教科書の会話例の場面、状況は説明文ではなく、イラストで示され、これから話される会話の内容についてイラストを参考に推測してから、会話を聞くことになっている。授業では、教師が生徒に推測を促すような問いかけを行ってからモデル会話を聞かせ、すべての語彙が理解できなくても、推測する習慣が身につけられるように指導していくことが求められる。そのためには、教師研修で教師自身が先に説明をしない授業のやり方を身につける必要がある。

ラオスの生徒はいい教師が必要だと考えているため、教師の影響は大きい。そのため、教師はカリキュラムを踏まえ、教科書のコンセプトや目的を理解した授業を行っていく必要がある。教科書には生徒が自ら考え、発見し、学習を振り返ることができるような、自律性をのばすためのポイントがある。例えば、各課の目標が Can-Do で示され、最後に生徒が自己評価をしたり、生徒がまず場面から文型や表現がどのように使われているのか機能を考えたり、生徒同士がグループで課題に取り組んだりできるようになっている。教師研修では、教師自身がやり方を体験し、どうして教科書がこのようにデザインされているのか考える時間があるとよい。

6. おわりに

以上、ラオス中等教育学校の中学1、2年生の日本語学習者がもつ言語学習ビリーフについて考察し、開発中の教科書のコンセプトとのギャップがないか、検討した。

2010年のカリキュラム改革では、グローバル化に伴い、競争が激化する時代において、生徒が社会に出たときに必要な知識、能力、技術が身につけられるよう学習者中心の授業が理念として掲げられた。それを受け、日本語科目においても21世紀型スキルにあげられる力や態度を養うことを目指している。ラオスの中学1、2年生のビリーフの傾向を見ると、目指す日本語授業を肯定的に捉えることができるようである。しかし、いくつかの点で今後の教科書開発、教師研修において検討すべき点を示すことができた。本稿では、具体的な教師研修のデザインの提案までは行っていないため、今後検討したい。また、現在の学習者が後期中等教育に進む段階でビリーフ調査を行うことも今後の課題であろう。

〔注〕

- 1) 第二外国語はフランス語、中国語、日本語、ベトナム語より選択。
- 2) 2015年9月より先行して日本語授業を開始した1校においては、中学1年生だけではなく、高校生を含めたほかの学年でも学校裁量で日本語授業を行っている。また、調査当時のパイロット校教員が異動したため、異動先の学校を含め、現在は4校で日本語が行われている。
- 3) アジアの中学、高校などに派遣され、現地教師と日本語授業のチームティーチングや日本文化の紹介を行う。

〔参考文献〕

- 阿部新 (2009) 「スペイン・マドリードにおける日本語学習者の言語学習ピリーフ」『名古屋外国語大学 外国語学部紀要』37、25-62
- 片桐準二 (2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Beliefs」『国際交流基金 日本語教育紀要』1、85-101
- 国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 ラオス (2017年度)」
< <http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/laos.html> > (2020年9月7日)
- 国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 ラオス (2013年度)」
< <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9222601/www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2013/laos.html> > (2020年9月7日)
- 国際交流基金「海外日本語教育機関調査 2009年」
< http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9222601/www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey_2009/2009-08.pdf > (2020年9月7日)
- 国際交流基金「海外日本語教育機関調査 2018年」
< <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/spreadsheet.pdf> > (2020年9月7日)
- 高崎美千代 (2014) 「メキシコにおける日本語学習者の特性 ―ピリーフ調査結果を中心に―」『国際交流基金日本語教育紀要』10、23-38
- 横林宙世・L. デニス・ウールブライト (2006) 「オーストラリア初等・中等教育学習者の日本語学習に関する BELIEF」『西南女学院大学紀要』10、107-120
- 吉川景子 (2018) 「ラオスにおける中等教育学校日本語教師の言語学習ピリーフ」『日本語教育論集』27、57-64
- 和田衣世 (2007) 「スリランカの大学生の言語学習ピリーフから日本語教育の改善を考える」『国際交流基金日本語教育紀要』3、13-28
- Jitbantao, Supornpan (2010) 「タイの高校における日本語学習者の日本語学習に対するピリーフ ―バンコクにある国立高校の日本語学習者を対象に一」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』7、21-30
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In Wenden, A. & Rubin, J. (ed.), *Learner Strategies in Language Learning*, pp. 119-129. London: Prentice-Hall.